第132号 たけの子だより 2021年1月11日

今、わたしたちは何を語り合ったらいいのだろう

NPO法人 青空保育たけの子

２０２１年を迎えました。コロナ禍の中、大寒波の中の幕開けですが、子どもたちという希望に日々携わることができる仕事に感謝せずにはいられません。

今回は全国保育連絡会会長でもある、福島大学の大宮勇雄氏が福島県保育連絡会ニュースに投稿した新年のご挨拶文を掲載します。

◆国は国民の命や暮らしを守ろうしているのか

昨年末、福島でもコロナ感染が急増、最も恐れていた医療崩壊が全国各地で生じています。台湾やニュージーランドのように政府が専門家と協力して手立てを講じれば「ゼロ・コロナ」にすることが可能なのに、我が国の政府は一貫して「ウィズ・コロナ」でやればいいという方針をとっていて、それがこんな悲惨な結果を招きました。人口当たりの検査件数は世界１５０位前後、病院の支援体制も全く不十分。いったい、どうなっているのでしょう？

そんなふうに考えたくはないですが、どう見ても、この国の政治は、国民の命や暮らしを守ることに税金を投じたくない人たちによって運営されているのではないでしょうか。海外との出入国を厳禁しているのはコロナの拡大を防ぐためでしょう。だったら国内の人の移動も抑えなくてはならない。感染が広がってもGoto キャンペーンをやめようとしないのはなぜでしょうか。週刊誌の報道によれば、関係業界からの「巨額献金」が背景にあること。「経済を回すため」と政府は言っていますが、実はごく一部の人たちの「権益確保」がねらいであって、国民全体への責任感がまったく欠如しているのではないでしょうか。

◆超格差を生んだ経済優先体制

思い返すと、我が国の政府は20年も30年も前からずっと、そういう国民の命や暮らしを著しく軽んじる政治を続けてきました。福島では、原発事故によって「ふるさと」が消えかかっています。「復興五輪」とか「アンダーコントロール」とか、耳にするのもいやな、ごまかしだらけの政治です。そのうえ、福島の意見も聞かず、汚染水の海洋放出を決めようとしています。

地域のくらしに欠かせない保育も福祉も医療も公共交通も、いろんな口実を作って（「財政赤字」だとか、「規制緩和」だとか）、次々に民営化したり、統廃合したり、営利の対象にしてきた結果、人員もベッドも賃金も減らされ続けてきました。私たちの所得だけでなく、生活の基盤となるこうした「エッセンシャル・ワーク」がどんどん掘り崩されてきたのです。みんなに必要なものなんだから、税金をおしげなく使うのが当たり前でしょう。「赤字」になっても何の問題はありません。

今の世の中、「経済」という言葉はまるで黄門様の印籠のよう。しかし「成長」は私たちに何をもたらしたでしょうか。わずか二千人の超富豪が世界人口の6割にあたる46億人分と同じ資産を保有しています。しかもその人たちの富は毎年ものすごい勢いで増え続けているのに対して、貧しい人たちの所得は逆に減り続ける一方。

全体としてみれば、生活に必要なモノの生産はもう十分足りているのです（「モノが売れない」というのは足りているということ）。それなのに、ほとんどの人は貧しくなり続けている、これがここ20年以上にわたる「経済成長」に実情です。何百兆円という内部留保をもつ大企業や、個人で一兆円を超える資産を持っている富豪たちは、死ぬまでにはとうてい使い切れないその富を、こんなに多くの人が苦しんでいる事態を目の前にして吐き出そうともしない。

言葉を失うほどの超格差、病的な貨幣愛、数えきれない苦しみやあきらめ・・・、こうしたものを生み出し続けているのが、「新自由主義」という経済体制です。それで利益を受けている人たち、つまり「今だけ、金だけ、自分だけ」という人たちが、日本人だけでなく世界中で権力を握っているのが今の世界の特徴です。

こういう政治、超格差を生み出し続ける経済成長―こういうのはもうやめなくてはいけません。際限のない利潤追求が自然や生態系を破壊し、温暖化を深刻にし、地球そのものを瀕死に状態にしてしまったのですから。

◆世界中に起きている「変革」への取り組み

今、私たちは「大きな変わり目」を生きようとしているのです。ですから、未来を創る子どもたちを育むということは、これまでとちがうやり方で生きよう、新しい社会を作ろうと語り合うことでなくてはなりません。私たちは子どもたちとともに、「世界を変える力として学ぶ力」とはどんなものかを、問い続け、探求しなくてはなりません。そのためには、格差や偏見や地域を超えてつながり合うことや、これまでと違ったやり方を試してみること、つまり想像力や創造力、協働性や思いやりを発揮することが、学びの中心に位置づかなくてはなりません。

こういう厳しい時だからこそ、一度立ち止まって、私たちは子どもたちと何を語り合い、何をめざして自分を磨いていくのか、じっくり考える年にしたいものです。

大宮勇雄

新しい年に、わたし自身心を新たにした文章でしたので、ご紹介しました。

辺見妙子